
没ネタ集

宇田川城重

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

没ネタ集

【Nコード】

N6048K

【作者名】

宇田川城重

【あらすじ】

書きかけて、うまくまとまらず、没にした（というより、途中でやめた）作品をここで紹介したいと思います。

「俺が完成版を書く！」という方は、ぜひともお願いします。

その時は、ご一報下さればと思います。

没ネタ ハヤテのごとく！（前書き）

ハヤテのごとく！ の没ネタです。

最初と最後まで書いて、途中がうまくまとまらず、やめました。

没ネタ ハヤテのごとく！

X月X日

とうとう私は家を出た。これで3日目。

世界を襲った不況の波は想像を絶するものだった。

ウソのように三千院財閥は傾いていき、傘下の企業が次々と倒産していった。

そして、経営権はお祖父様から他人へと移ってしまった。

財産も屋敷も失い、使用人は次々と去っていき、マリアとハヤテだけが残った。

伝手を頼って公営の団地へと引越した。ボロボロで所々にひびが入っている、寂れた団地だ。

4人での狭く苦しい団地暮らしは窮屈でイライラする。

ルールを作るには歴史が足りなくて、ささいなことでケンカが絶えない。

ある時、ハヤテが生活費を請求してきた。

「少しはバイトの給料、家に入れて下さい。今の状況、わかってるんですか？」

私はブチ切れた。

大体、あなたの働きが悪いからこうなったんだ！

あなたのその不幸を呼ぶ体質が、私たちをメチャクチャにしたんだ！

私は持っていたグラスをハヤテめがけて投げた。

グラスはハヤテの額に当たって、びっくりするほど血が流れた。

ハヤテは無表情のまま、血を流したまま立ち尽くしていた。

マリアは声を殺して泣いた。お祖父様は烈火の如く怒った。

私は家にいられなくなった。

ネットカフェを転々としていたが、このままじゃ明日はない。

グラスのことをハヤテに謝ろう。

私は携帯を取ったが……

「……着信拒否になってる！」
家に戻って謝ろう。

ピンポーン……

「……！」

「……マリア、開けるな。ナギだ」

「でも」

「開けるな」

「開けて……！ 開けて！！ 開けてよ……！ 開ける……！」

何度ベルを鳴らしても、ドアを叩いても、返事はない。

「開けてよ……ねえ、開けてよ……ねえ……」

私は帰る家を失った。

(作者注・途中は書かないまま、没にしました)

傷つき、ボロボロになってナギは家に戻った。

もう帰る所は他にない。入れてくれるまで、土下座でもなんでも、何日でもし続けよう。

ナギは震える手で、ドアのベルを押した。

「……」

しかし、何の返答もない。

「……やっぱり、開かないか……」

ガチャ……

開いた！？

「お嬢様……」

出てきたのはハヤテだった。額には、絆創膏が貼ってある。

「……」

「……………」

沈黙がしばらく続く。

「一言言わなければならぬ言葉が、出て来ない。

『ごめんなさい』が。

「……………」お帰りなさい。さあ、入って下さい。お腹すいたでしょう」

ハヤテの優しい言葉を耳にした瞬間、ナギの目から涙が溢れ出た。

「……………」さい……………」

「？」

「……………」ごめんなさい……………」

絞り出すように、ナギはやっと言いたかった言葉を口にした。

「お嬢様……………」

「謝って済むことじゃないぞ。過ぎたことはもうどうしようもない」

後ろから帝が姿を現した。

「とにかく入れ。マリアに食事を作らせる」

わっと泣き崩れたナギを、ハヤテは抱えるように家の中に入れた。

「実は宝くじで100万円当たったんですよ」

「ええっ！ ホント!？」

「そうだ。だから特赦って奴だ」

「お食事をお持ちしました」

マリアが持ってきたのは、すき焼きの鍋だった。

「わあ、すごい!」

「おいしそうでしょう。久しぶりですよね。ささ、食べましょう」

「ハヤテ……………」

「なんですか、お嬢様。改まって」

「ごめんなさい……………」

「ははは、もういいですよ。怒ってなんかいませんから。綾崎ハヤ

テは不死身です。ははは」

「うえっ、ぐすっ、ぐすぐす……………」わあああ

堰を切ったように、ナギは声を上げて泣き出すのだった。

ナギが寝た後で……

「……ナギには悪いが、生活のためだ」

「そうですね。お嬢様にこういった形とはいえ、一働きして頂かないことには」

「それにしても、あれは痛かったなあ。怒ってないわけないでしょ。人の顔に傷をつけてくれて」

先程の優しい雰囲気嘘のように、3人はどす黒い笑顔になっていた。

「ですよねえ」

「お嬢様には、これからもたっぷり苦しんで頂きましょう。それこそ何倍にもしてお返ししますよ。」

今まで僕がされた仕打ちはこんなもんじゃないんですから。くくくく……」

END

没ネタ ハヤテのごとく！（後書き）

途中を描いて下さる方、もっと面白くしてやるという方、お待ちしております。

没ネタ 魔法少女リリカルなのは(前書き)

魔法少女リリカルなのはの没ネタです。
元ネタわかる人、たくさんいるかな？

没ネタ 魔法少女リリカルなのは

「あの世で少し……いや、かなり頭冷やそうか……」

「……撃てよ、さあ、撃ってみるよ、中卒の職歴なし！ 撃つたら
ブタ箱どころじゃない、蜂の巣だぜ！」

悪態をつきながら、警視正の声は震えていた。対照的に、なのはは
恐ろしく落ち着いている。

「さよなら……」

なのはの銃が火を吹こうとしたその時だった。

「やめるんや、なのはちゃん！！」

聞き慣れた声が、壁の向こうから聞こえてきた。

「もう終わりや。終わったんや！ 勝てへんよ。警官が100人以
上、銃を構えて取り囲んでいるんやで！ さあ、帰ろう」

部屋に入ってきたのは、かつての上司にして親友……はやてだった。
「……何も終わっちゃいない！！ 何も！ 言葉なんかじゃ終わら
ないんだよ！ 私だって好きで戦ってたわけじゃなかった！ やれ
って言われたからやっただけ！ 私は勝つために全力を尽くした！
でも誰かが邪魔したんだよ！」

さっきの冷静さが嘘のように、なのはは絶叫する。その横で、警視
正は気絶して倒れていた。

「管理局に戻ってみれば、局の前に市民がぞろぞろといて、 訳の
わからない抗議してくるんだよ！ 私のこと、人殺しだの、悪魔だ
の聞くに堪えないことを言いたい放題！ あんな人たちに何が言
えるわけ！？ 戦いが何かわかって言ってるわけ！？ ええっ！
私と同じ経験をして同じ思いをして言ってるの！？」

「みんな失望して苦しんでいたんや。もう過ぎたことや」

「はやてちゃんにはね！ 私には青春なんか、人生なんか空っぽだ
よ！ 戦場では命を預け合えるような信頼関係があった。助け合い
支えあってたよ。なのにここじゃ何もない！」

「なのはちゃんは私にとって大事な友達の一人なんや。野垂れ死にはあかん」

「あつちじゃへりも飛ばした。戦艦にも乗れたよ。SLBも撃てた！ 1発100万もするカートリッジを自由にリロードできた！

それが日本に戻ってみればコンビニの店員にもなれないんだよ！！
実家の店は不況で潰れてて、仕事探そうにも中卒だの、職歴なしだのバカにされて！！ 時空管理局で教導官をやってましたなんて、そんなアニメみたいなことが言える訳ないじゃない！」

なのはは持つていた銃を壁際の戸棚に叩き付けた。ガラスが割れる音が響き渡った。

「こんな、こんなことって……惨めすぎるよ……あの頃は良かったよ。地上部隊にも友達がいた。みんないい人だったよ。あつちじゃ友達のごまんといたのに……それなのにどう？ ここじゃ何もなし……」

はやては返す言葉もなく、呆然とするしかなかった。

「ねえ、はやてちゃん……私はどうしたらいいの……教えて……教えてよ……はやてちゃん……フェイトちゃん……ヴィヴィオ……」

その後はもう言葉にならなかつた。嗚咽し続けるなのはを、はやては静かに抱きしめた。

「ごめん、なのはちゃん……全部……私が悪いんや……許して……許して……うつつ……」
はやても泣いていた。

はやてに抱きかかえられるように外に出てきたなのはを、警察の照明灯が照らす。さらに、報道陣のフラッシュの嵐が、二人の顔をさらに照らした。

やがて駆け寄ってきた刑事が、なのはに手錠をかけた。

連行されていくなのはの横で、警視正が救急車に乗せられていた。

生きているのか死んでいるのかわからないが、もうそんなことはどうでも良かった。

没ネタ 魔法少女リリカルなのは（後書き）

途中を描いて下さる方、もっと面白くしてやるという方、お待ちしております。

ところで、機動六課と日本の警察がガチンコで戦ったらどうなるだろう？

「時空管理局！？ 寝言言ってんじゃねえよ！！」

「テレビの見過ぎじゃねえのか！？」

没ネタ こみつくパーティー（前書き）

こみつくパーティーの没ネタです。

プロットだけ書いて、途中がうまくまとまらず、やめました。

没ネタ こみつくパーティー

キング・オブ・ザ・ロード ～函館の星たちへ～

こみパで、ある本が評判になる。タイトルは『函館の星たちへ』。内容は、函館に住む様々な人々の生きる姿を描いた、笑いあり涙ありの物語。

こみパの女王を自称する詠美、その座を脅かされると危惧した詠美は、渋る和樹に強引に『函館』の作者のことを探らせる。

ところが、会場のどこにも作者の姿が見えない。実は、『函館』は、無人共同スペースに置かれた本で、作者は初めから来ていなかったのだ。

『函館の星たちへ』の作者は一体何者なのか？

調べた結果、作者は普通のサラリーマンで、鴨川という男だった。かつてはプロ漫画家を志していたが芽は出ず、ついに断念して就職した。

最後のチャレンジのつもりで持ち込んだのが、コミックZ編集部。これでだめだったらあきらめて就職しようと決意していた。

その時の担当が、現在の澤田真紀子編集長だった。

当時はまだ平編集だったのだが、実力を買われていた。

原稿を見てもらった鴨川だが、「なかなかいいけど、うちに合わないわ」と一蹴される。

帰り際に「逃がした魚は大きかった、って言われるようになってね」と言われる。

しかし彼は、もう全て終わったと、ペンを折ることを決意する。就職して、仕事はそこそこうまくいっていたが、何かが満たされな

い。

そんなある日、部屋を掃除していたら原稿が出ていた。

最後の原稿だった。あの時一蹴された原稿だ。

気がついたら彼は、その原稿のリメイクをしていた。

その最中にも、どんだん次のエピソードが浮かんでくる。

あつという間に、単行本一冊分の原稿を描き上げてしまった。

塚本印刷という小さな印刷所に印刷を依頼し、本を作った。

しかし、作ったはいいが日の目を見せる場がない。

作った本を持って余していた彼だが、ある日『こみつくパーティー』という同人誌のイベントを知る。

その共同スペースに出品する。結果は、十冊ほど売れただけ。

まあ、こんなものだろう、と彼は気にもとめなかった。

ところが、余った在庫がもつたないので二回目の出品をしたときのことだ。

なんと、あつという間に完売になってしまったのである。

続々と寄せられる読者からの手紙。

「感動しました」「初めてマンガで泣きました」「早く続きを描いて下さい」

そして、「まだ読んでません、増刷して下さい」という手紙も多数寄せられた。

あわてて鴨川は増刷して、次のこみパに出品するがまたも完売。海賊版まで出回る騒ぎとなった。

「やっぱり感動だよな、函星（自然にできた略称）って」

「函星、ドラマでやってくれないかな、なんてな」

そう、この本こそが、かつて最後の持ち込みで袖にされた『函館の星たちへ』だったのである。

「絵うまいし、面白いし、非の打ち所がないよな」

「これに比べたら、大庭詠美なんか幼稚園児の落書きだぜ」

客たちの噂を聞いてしまった詠美は激しく鴨川に嫉妬する。

そして、ついに売上げで抜かれてしまった。

ある日、今回のこみパに鴨川が来ている、と聞き付けた詠美は、恥をしのんで自分の本を見てもらう。

読み終わった鴨川は首をかしげながら、

「あー……だめだねえ……これじゃ……」

「だ……だめ……」

一部始終を見ていた周りの客からもそうだ、その通りだと声が上が
る。

いたたまれなくなった詠美は売り場を放り出して逃げ出してしまい、
売上げは鴨川の圧勝に終わった。

何を言ったと思ってるんだ！と詰め寄る和樹、由宇に対し、

「見てほしいと言ったから、正直な感想を言ったただだよ」

「売れなきゃ意味がないってのは彼女の十八番でしょ」

「少なくとも質では勝ってる自信あるよ」

『函館の星たちへ』を見てみる和樹たち。

確かに、詠美の本より密度もはるかに濃くて面白い。

悔しいが、自分の本よりもずっと良くできている。

しかし、ケンカばかりしていても詠美思いの由宇は、

「あんたは最低の同人やで！」

と暴言を吐いてしまう。鴨川も怒って、

「お前みたいながきに何がわかる！」

鴨川に殴りかかろうとしたところを由宇は牧村南に止められ、おと
なしく引っ込むしかなかった。

そんなある日のこと、鴨川の家を澤田が訪れた。

コミックZで、アニメ化前提で連載させてほしい、と言うのだ。

しかし、そのアニメ版のプロットを読んで鴨川は憤る。

原作の良さがまるで生きていない、見る者に媚びる作品になってい
た。

「お断りします」

「まだあの時のことを根に持ってるの？」

「違います。これは、『函館の星たちへ』ではありません。別の作
品です」

「原作と変わったものになるのはやむを得ないことなのよ。それは
あなただっただけわかっていていいでしょう。人に見て頂くのを第一に考え

てのことよ」

「違う！ あなたは金儲けのことばかり考えてる！ 同人誌で出した時、読んでくれた人はみんな、『函館』のありのままの姿を愛してくれました。その人たちの期待を裏切るような真似はしたくありません！」

「それは少数の人たちでしょう？ 大多数に受けないと意味がないのよ。それができないんじゃない、いつまでたってもプロにはなれないわ」「だったら…… だったらプロになんかなれなくてもいい！ 少数の人を切り捨ててまで大多数に受けるくらいなら、同人誌で書いてた方がいい！」

話し合いは結局付かず、澤田は帰る。

数日後、今度はテレビ局の人間がやってきて、ドラマ化しないかと言う話を持ちかける。

ドラマ版のプロット、こちらは素晴らしい出来であった。

原作を100%とするなら、ドラマ版は120%になりうるものだった。

「書き直せとおっしゃるなら、いくらでも書き直します！」

テレビマンのその言葉に嘘はなかった。

鴨川はついに了承する。

澤田は上司に呼ばれる。

「澤田くん、君は二度も鴨川を逃がしたね。もう三度目はない、責任を取ってもらおうぞ」

澤田は編集長を降ろされ、別の部署へ左遷されてしまう。

が、気が付くと呪いが解けたように、気持ちが楽になっていた。

売り上げを意識するあまり、売り上げよりも大事なことを忘れていたのだ。

そうはならないとずっと思っていたはずなのに、いつしか忘れていた。

その次のこみパ、初めて自分のスペースを取った鴨川のもとへ澤田が訪れる。

一波乱あるかと思われたが、澤田が鴨川にしたのは謝罪だった。
しかし鴨川は、

「許すも許さないもありません」

「僕はマンガのことで誰かを恨んだことはありません」

その言葉に澤田は、そして横から一部始終を見ていた詠美や由宇たちは泣き崩れる。

名実共に、鴨川はこみパの王の中の王、『キング・オブ・ザ・ロード』だった。

そして、その日の夜、ドラマ『函館の星たちへ』の第一回が始まった……。

没ネタ ごみつくパーティー（後書き）

これを清書して下さる方は……いませんよね。

没ネタ 新世紀エヴァンゲリオン（前書き）

なのはの没ネタとかぶる所があります。

没ネタ 新世紀エヴァンゲリオン

「……撃てよ、さあ、撃ってみるよ、ネルフのクソ女！ 撃ったら
ブタ箱どころじゃない、蜂の巣だぜ！」

悪態をつきながら、署長の声は震えていた。対照的に、アスカは恐ろしく落ち着いている。

「さよなら……」

アスカの銃が火を吹こうとしたその時だった。

「や、やめるー！！」

後ろから絶叫がした。

「やめるんだ、アスカ！」

振り向くと、そこには見慣れた顔があった。

「……シ、シンジ！？ どうして？」

「もう終わりだ。終わったんだよ！ 警官が100人以上、銃を構えて取り囲んでいるんだ。逃げるところはどこにもない……」

その時、外から銃弾が撃ち込まれた。警官の威嚇射撃だった。

「やめる、撃つな！！」

外に向かって、シンジは叫んだ。

「君はたった一人で戦争を始めてしまったんだよ。でももう任務は
終わりだ。ミサトさんには僕から連絡して、迎えをよこしてもらおうよ。さあ、帰ろう」

その時、アスカの肩がぶるぶると震え出した。

「……何も終わっちゃいない！！ 何も！ 言葉なんかじゃ終わらないのよ！ 私だって好きで戦ってたわけじゃなかった！ やれっ
て言われたからやっただけ！ 私は勝つために全力を尽くした！
でも勝てなかった！」

さっきの冷静さが嘘のように、アスカは絶叫する。その横で、署長は気絶して倒れていた。

「ドイツに戻ってみれば、空港に市民がぞろぞろといて、 訳のわ

からない抗議してくるのよ！ 私のこと、何万人も餓死させただの、悪魔だの、聞くに堪えないことを言いたい放題！ あんな人たちに何が言えるわけ！？ 戦いが何かわかって言ってるわけ！？ ええっ！ 私と同じ経験をして同じ思いをして言ってるの！？」

「みんな失望して苦しんでいたんだ。もう過ぎたことだよ」

「アンタにはね！ 私には人生なんか空っぽよ！ ネルフじゃ命を預け合えるような信頼関係があった。助け合い支えあってたわ。なのにここじゃ何も無い！」

「アスカは僕にとって最後の一人なんだ。野垂れ死にをしないでくれよ」

「あつちじゃヘリも飛ばした。戦艦にも乗れたわ。国家予算が飛ぶような武器を自由に使えた！ それがドイツに戻ってみれば駐車場の係員にもなれないのよ！！」

アスカは持っていた銃を壁際の戸棚に叩き付けた。ガラスが割れる音が響き渡った。

「……………うっ、うっ……………みんな……………みんな、どこ行っちゃったのよ……………うっ……………」

アスカはうずくまって嗚咽する。

「あの頃は良かったわ。学校にも友達がいた。いい人だった……………それなのにどう？ ここじゃ何も無い……………ヒカリ……………覚えてる？ クラス委員長の」

シンジはかすかに頷いた。

「彼女とはウマがあつて、よくバカ話をしたっけ。恋の話とか、おしゃれの話なんか……………いつか私が車の免許取ったら、タイヤが擦り切れるまで走ろうねって……………鈴原も、相田も、変な奴だったけどいい奴だったわ……………鈴原……………夢に見るのよ。鈴原が乗った参号機が、初号機に握りつぶされる夢を。なぜか私が、初号機に乗ってるのよ。あいつの体が、プラグごと初号機の手握りつぶされるのよ……………すごい悲鳴だった！ あいつの血や肉が私の体にべっとりついてこんなに！ はがさなきゃならなかった！ 鈴原が、俺の体中に飛び散

って！ 私、なんとかあいつを抑えようとするのよ！ けど、どうしても内臓がどんどん出てくるのよ！ どうにもできなかつた！ あいつ言うのよ、『ワシ、うちへ帰りたい、帰りたいんや』。そればかり…… 『帰りたい、インチョに弁当の礼言いたいんや』。でも…… あいつの足が見つからないのよ…… 足が見つからないのよ…… もう7年にもなるのに毎日夢に見るのよ…… 目が覚めてどこにいるのかわからない時もある。誰とも喋れない…… 時には1日、1週間も…… 忘れられない…… あれが…… ねえ、シンジ…… 私はどうしたらいいの…… 教えて…… 教えてよ…… シンジ…… ヒカリ…… ミサト……」

その後はもう言葉にならなかつた。嗚咽し続けるアスカを、シンジは静かに抱きしめた。

「ごめん、アスカ…… 全部…… 僕が悪いんだ…… 許して…… 許して…… っつっつ……」

シンジも泣いていた。

シンジに抱きかかえられるように外に出てきたアスカを、警察の照明灯が照らす。さらに、報道陣のフラッシュの嵐が、二人の顔をさらに照らした。

やがて駆け寄ってきた刑事が、アスカに手錠をかけた。

連行されていくアスカの横で、署長が救急車に乗せられていた。

生きているのか死んでいるのかわからないが、もうそんなことはどうでも良かった。

没ネタ こみつくパーティー（前書き）

こみつくパーティーの没ネタです。

没ネタ こみつくパーティー

この数ヶ月のことをマンガにして、ウチは水本先生に見てもらった……。

『もうイヤ！ あんたとはもう解散！！』

『俺ももうたくさんだ！！ 恩知らず？ 知らねえバカヤロー！！』
詠美とのケンカ別れ、和樹にも去られたこと……。

「つまらん」

原稿を投げ捨てた先生はそれだけ言つと、さつさと部屋を出て行った。

しばらくウチは啞然としていた。

家に帰ってから、ウチはネームの描き直しにかかった。

いつもの同人活動とは比較にならないほどに、ウチは必死になった。猪名川由宇の名にかけて、面白いと言わせた。

しかし、何度描き直した原稿を見てもらっても、

「つまらん」

それしか言われなかった。

確か、ちょうど10回目の描き直しを見てもらった時のことだった。

「つまらん」

先生の返事は同じだった。

「待って下さい」

立ち去ろうとした先生を呼び止めた。

「どこがつまらへんのでしょうか？ 言つて下さい」

「すべて」

立ち止まった先生は振り向きもせずと言った。

「あ、あなたのマンガやって、あなたのマンガやって全部完璧なわけやないでしょう！？ 面白いところもあるし、つまらへんところもある！ それを教えて欲しいから、こうして見てもらってるんじゃないですか！！」

「……面白いところは一か所ありません。それも描き直せば直すほど、つまらなくなっている」

「……!?!」

先生は振り向いた。

「何よりも作者の心根の卑しさが感じられて、吐き気がする。これが私の、正直な感想です」

「こ、心根が卑しい……!?!」
シヨックだった。

ウチは二人に、すまないことをしたのを詫びるつもりで描いたのだ。それをよりによって、心根が卑しいと言われた……。

「ウツ、ウツ……」

屋台で、私は泣きながらヤケ酒をあおっていた。

「マンガ家ごときがドアホ!! あいつホンマは、字読めへんのかも知れへんな。きつとそうや……」

その時だった。

「いらつしゃい!」

「ビール一本」

水本先生が屋台の暖簾をくぐって、ウチの隣に座った。

「おい、水本! あんたホンマは、字読めへんのやろ。正直に白状したらどうや! ヒック」

酔っぱらったウチは、先生を呼び捨てにして悪態をついた。しかし、先生は涼しい顔だ。

「あんた、それ誰のために描いたんですか」

「だ、誰って、自分のためや。何か描かずにいられなかったもんをぶつけたんやで」

「自分のために描いたものを人様に読ませるなんて、失礼じゃありませんか?」

「うっ……」

一瞬ウチはひるんだが、それでも言い返した。

「それなら、そう言うたらええやろ!! 俺はお前の描いたもんな

んか読みたくないって、最初っから言えばええやろ！！」

「当たり前なんですよ、悲しいものを悲しく描くなら誰にだって描ける。それは自分の為に描いているんだ、自分の悲しさを寂しさを、苦しさをわかって下さいと描いているんだ。そんなものを人様に見せるぐらい、傲慢なことないんじゃないでしょうかね」

ウチは返す言葉を失った。「皆、苦しいんです。生きるって悲しいですよ。寂しいですよ、あなただけじゃないんだ。自分はひとつ悲しさを乗り越えられた。うん、これなら笑って人に話してやれる。元気出さないよって言ってやれる。それで初めて、人に見てもらえる舞台の幕が開くんです」

没ネタ こみつくパーティー（後書き）

元ネタは人間交差点（矢島正雄／弘兼憲史 著）
文庫版16
巻『幕』です。

没ネタ 魔法少女リリカルなのはStrikers(前書き)

7秒フォールの巻

没ネタ 魔法少女リリカルなのはStrikers

『時空管理局の副隊長、7秒でフォール負け!』

『「本場に副隊長?」失望と疑問の声』

翌朝、新聞のスポーツ欄に大きく見出しが出ていた。

ヴィータは試合開始直後、繰り出されたバック・フィリップをまともに食らい、そのままフォールされてしまったのだ。

いくらヴィータに油断があったとはいえ、あまりにも不甲斐ない負け方に観客の怒りは頂点に達した。

リングには物が投げ込まれ、警察が出動する騒ぎになった。

ジェシー・メイビアは怒って帰っていった。

翌日、ヴィータとシグナムは、ジェシー・メイビアのジムに、断りもなしに入ってしまった。

ジェシーがいた。

「何の用だ?」

門下生たちの視線が突き刺さるのをものともせず、ヴィータが不敵な笑みで言った。

「なあ、改めてあたしたちと模擬戦やってくれないか?」

シグナムも続いて言う。

「昨日はあんな結果だったが、面白そうだからな。あんたも納得いかないだろう?」

しかし返ってきた返事は、

「失せるーっ!!! 汚らわしい!!!」

3分後、ヴィータとシグナムは門下生たちに袋だたきにされ、外に放り出された。

多勢に無勢、手も足も出なかった。

「俺は負け犬は嫌いだ! どうしても対戦したいなら、その自惚れ

を直つていふ。」

没ネタ けいおん！（前書き）

軽音楽部に男子部員が入る……という二次創作は、なぜかどれもこれも、主人公の一人称で語られる。三人称の文章というのを読んだことがない。

没ネタ けいおん！

「何が、『これが軽音部のいいところ』だ。みんなはただ、部室で茶飲み話をして、そのついでに練習をしてるだけじゃないか」

「……………」

律を始め、みんなうなだれた。

「俺はもう……………辞めるよ。もうだめだ。あきれて怒る気力もなくなつた。こんな部にいたって、曲一つ作れやしない」

「ま、待つてよ！ 翔くん！ 曲作るのに、うるさくて邪魔だつて言うなら謝るから！」

唯が引き止める。

「私たちには、しょーたの曲が必要なんだよ！ あんたはすごいプロデューサーなんだから」

律が呼びかけるが、翔太は振り向かず去っていった。

「無理だよ。今の私たちに、翔太を引き止められるわけがない」
漣が肩を落として言った。

「翔太くん……………」

紬は半泣きになっている。

「なんとか考え直してくれないか」

「だめだ」

何度も、同じ問答が繰り返された。

「どうしてもだめ？ あれだけ謝ってるのに？」

和が見かねて聞いてみたが、

「だめなものはだめだ。真鍋、あのままでいいと思うか、軽音部」
「それは、ちょっと……でも、もう少し待ってあげたら？ みんな反省してると思うし」

「一度ぐらい反省しても、また同じことを繰り返すに決まってる」

「みんなのこと、信じないの？」

「信じるに値する連中じゃない」

「信じるに値しないって……」

「お前はあんなだらけた雰囲気の中で生徒会の仕事をしろと言われてたら、できる自信があるか」

「確かに牛嶋くんは間違ってると思うけど……あんなの見せられると……牛嶋くんは気持ちの整理が上手くて、余計なことなんか考えないんだろうね」

Somebody's Dream 誰もが夢を探してる

この青い星のそれぞれの街角で

痛みも哀しみも争いもすべて

この美しい星空 昨日へ連れ去る

You just live on the planet

どんな時もあきらめないで

(We just live on the planet)

その瞳に映る愛を信じて

Anytime winner, Sometime loser
But i believe in you

Anytime loving, Everytime looking
You make my dreams come true
だからもう一度 Catch your earth, blue
star

軽音部は全員、土下座して頼み込んだ。

「お願いします！ その曲を私たちに下さい！！」

翔太が律に近づいてきた。殴られると思った。

でもいい。殴られて当然のことをしたんだ。

「ぶつてもいい。でもあんたのことは本気で信じてるから。それだけはわかって下さい……………」

「バカなこと言うな。男が女を殴れるか。何のためにこの曲を作ったかわかるか」

「じゃ、じゃあ……………」

「練習開始だ！！」

「わーっ！！」

部員たちは歓声を上げた。

唯も、漣も、紬も、律も、梓も泣いていた。

「翔くん、最初から今まで……………大好きだよっ」

唯の言葉は、翔太の耳には入らなかった。

没ネタ けいおん！（後書き）

男が振り回されるんじゃなくて、男が振り回すというのも新鮮でいいかも。

没ネタ 魔法少女リリカルなのはStrikers(前書き)

管理局が北朝鮮、中国と戦う話があったら、読んでみたいね。
誰も書かないだろうけど。

本当、何のためにあるの、管理局って。

没ネタ 魔法少女リリカルなのはStrikers

「中国や北朝鮮を何とかしてよ。独裁者の首取って、政権を崩壊させてよ。故郷のため、日本のためだよ」

「それができたらやつとるわ！ 言われへんでも」
はやてが吠える。

「じゃあ、あんたたち、結局何のためにいるわけ？ 例の事件が終わった後、一体何やってるの？」

「……」

存在意義を問われ、一同は黙り込んでしまう。

「何が時空管理局の教導官だ。日本に戻ってみれば、ただの半端者じゃねえか」

「なっ……！！」

なのはが詰め寄ろうとする。

「下手なことするなよ。魔法使ってみろ、警察が来るよ。私は時空管理局の教導官だなんて、アニメかマンガみたいなのが言えるのか？」

「ぐっ……」

なのは、フェイト、はやては悔しさを噛み締める。

「まさか、私に手を出したら、管理局が黙っちゃいないよ、部隊連れて挨拶に来るよとか言わないだろうな。こっちの警察や自衛隊相手にケンカする覚悟があるか？」

三人は返す言葉がない。

「中途半端な正義が、一番悪いんだよ……！！」

「どうしろっていうわけ……？」

フェイトが絞り出すように言う。

「じゃあさつき言ったように、中国や北朝鮮やつつけてきたら？ 少なくとも英雄になれるよ。ここで一生安泰に暮らせるよ」

没ネタ 魔法少女リリカルなのはStrikers×クロサギ(前書き)

私の楽しみは、『なのは』に出てくる連中がメタメタにやられるのを見ることだ。

「私はこんな手だったんですよ。16で勝負すれば良かったのに」「黒崎の手持ちのカードの合計は……12だった。」

そして……。

「なのは！ 準備は!?!」

士郎が声をかける。

「もう少し!」

「急げよ！ あ、母さん!」

恭也が手を止め、壁に向かったままの桃子に言う。

「母さん！ 黒崎さんが来たら、丁重にもてなすんだよ!」

続いて美由希が、

「そつだよ！ 母さんが使い込んだお金と借金を立て替えて、お店を続けさせてくれた黒崎さんへのご恩に少しでも報いなきゃ!」
「聞こえているのかいないのか、桃子はブツブツとつぶやいている。」

「16……5以下……」

やがて、黒崎が店にやってきた。

「どうも、こんにちは」

高町家一同、土下座して出迎えた。

「……いらっしやいませ!」「……」

桃子を除いて。

「ドボーン……」

没ネタ 魔法少女リリカルなのはStrikers×クロサギ(後書き)

『なのは』のキャラがボロ負けに負ける話、大募集中！

没ネタ 魔法少女リリカルなのはStrikers(前書き)

所詮、時空管理局はこんなもの。

没ネタ 魔法少女リリカルなのはStrikers

「奴らの野望はどんどんエスカレートしていった。次々と魔法と圧倒的な軍事力で逆らう市民を殺していった。あちこちの次元世界での軍隊や警察でもどうしようもなかった」

「……………」

「そして、ついに奴らは……………自分たち魔導師以外の全ての人類を……………絶滅させると言い始めたんだ！！」

「な、何だつて！？」

「そんなバカなことをしたら……………魔導師だって生きていけなくなる……………」

「そうだ。それでももう、暴走は奴ら自身にも止められなかったんだ。そこで立ち上がったのが……………多くの次元世界から集まった戦士たちだった。ウルトラマン、戦隊、仮面ライダー……………彼らは団結して管理局に対抗した。そして、歴史上には刻まれなかったが、壮絶な戦いが始まった。それが第一次時空管理局戦争だ！」

「それで……………その戦いは一体……………」

「激しい戦いの末、戦士たちの勝利に終わった。管理局は軍事組織を解体され、武器を全て没収されたのち、治安機構として再編された。奴らの野望は未然に防がれたさ……………」

「ちよ、ちよつと待って！ 歴史に刻まれなかったって言ったよね？ 私もそんなの聞いたことないよ。どうして記録に残ってないの？」

「それには訳があるんだ」

没ネタ 魔法少女リリカルなのはStrikers（後書き）

なのは、はやて、フェイトがブタ箱にぶち込まれる、あるいは失業、
乞食になるなど、社会的死を迎える作品大募集中！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6048k/>

没ネタ集

2011年10月6日23時33分発行